

# 連珠っておもしろい

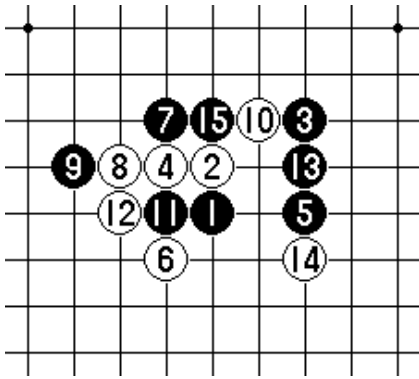
## 九段 河村典彦

### ● 第106回 ●

#### ■ コロナ禍での名人戦②

前回同様、名人位決定戦の続きを解説していこう。既報の通り、中村名人の防衛となった。60歳を超えて未だ名人を保つことは容易ではない。まさに超人レベルの快挙といえるだろう。今回は奇数局で名人が勝利しているが、防衛のためには重要であった第3局を中心に解説していきたい。

< 第1譜 1~15 >



#### ■ 第三局

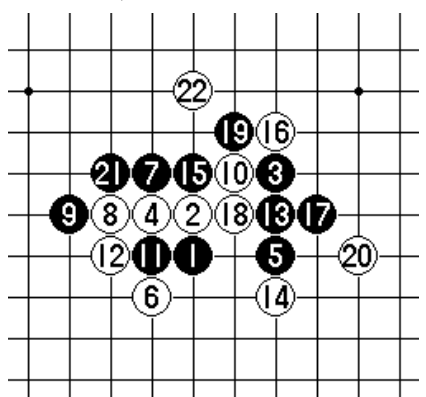
仮先黒 中山 白 中村

疎星で白4が横断の場所以外なのは決定戦ではおそらく初めてであろう。これも四珠交代打ちになった産物だろうか。黒5に白6は強防で、黒が主導権を保つには、7と防ぐしかなさそう。ここで白8と一本引けるのが大きく、この交換はかなりの戦果だろう。

ただ、黒も9と止めておいてまだまだこれからで、白10と防ぎに行つてまるで会話をしているかのような手順である。

少し進んで白14まで進んだ時、次の黒15が最初のポイントである。白に三々が残っているの、黒は何か防がなければならぬ。反対から叩くのが普通と思つていたら、黒15であった。これは、かなり攻めを重視した一手で、並々ならぬ気迫を感じさせる一手でもある。

< 第2譜 16~22 >



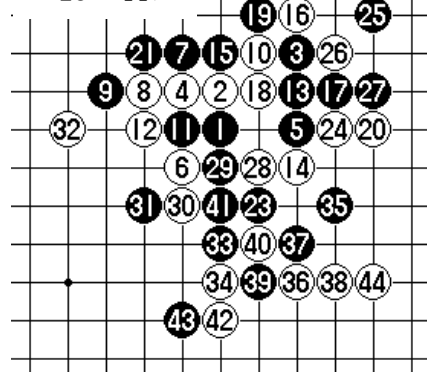
対して白も16、18と慎重に防ぐ。特に18は急所の場合で、ここに一着入れておかないと、黒の筋が抜けていきそう。この後の黒の展開が難しいと思つていたら、黒21と打たれた。当日はネットでの解説をやつていたので、この21は少し早いものでは？という印象だった。ただ、こう打つたからには、下辺に展開するの

だろうとは見ていた。この次の一手が間違いなく第2のポイントとなるだろうとは予想していた。解説陣でも意見が割れていた。解説陣でも

想が当たった人はいなかった。それほど難しい局面とも言えるだろう。

< 第3譜

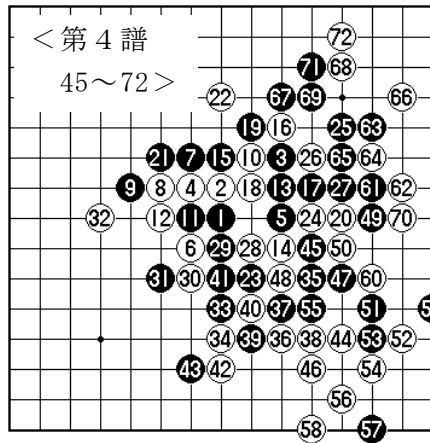
23~44 >



打たれた一手が黒23だった。中山君もあまり自信はなかつたと思うが、どこに打つても一局である。対する白24がえ？そこ？という手であったが、よく見るといい手だった。こういう地味な手を堂々と打てるのもまた中村名人の強みでもある。

この手を境に攻守が交代したように、黒25からは盤面を埋めに行くという打ち方に明らかに変わっている。

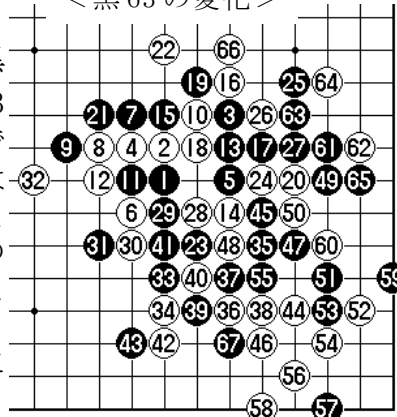
進んで白36に対する黒37が損な一手で、ここは40に打っておく手で何事もなかった。すかさず白に40と打たれたのが痛く、白44まで一気に土俵際まで追い詰められてしまった。黒がピンチだ！



黒45から時間が少ない中でよく防いでいたが、黒は長連筋にされたのが痛く、白60までで防ぎがなく決まったかのように見えた。しかし黒61からは最後の抵抗で、何とかなるようにも見えたのだが、白70に打

たれて先手を取られてしまったのが痛く、白72までで白勝ちとなった。しかし、黒の止め方が良くなく、白60の後でも黒に止める手があった。後でパソコンで調べて分かったのが次の図。

<黒63の変化>

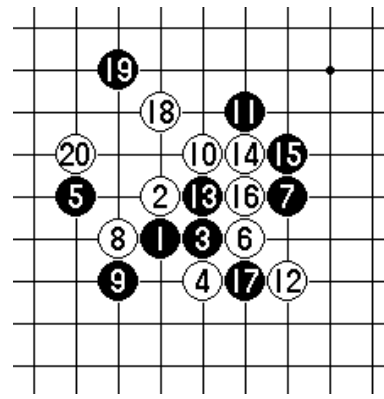


黒63ではこのようにミセ手で打ち、黒65の三引きに後手を引かずにおけば、黒67に回って防ぐことができた。四ノビをしたために、後手になってしまったのが痛かった。(白66でできたミセ手はノリ手で防げている) これですべて圧倒的に名人優位になったが、名人もまだま

だ気は抜けないだろう。続く第4局も見よう。 続

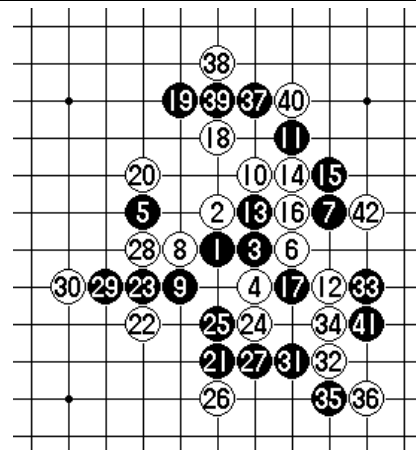
黒 中山 仮先白 中村

<第1譜 1~20>



第4局はこれまた予想外の雨月であった。珠型を予測するのはなかなか難しい。桂馬バサミに黒5は最近よく打たれているようだ。白8に対する黒9もここが主流らしい。なかなか最新情報に触れていないのでこのあたりの感覚はわからないのだ。中村名人にはわからないだろう。ここからの展開もよくわ

段落。次の黒21がどこに打たれるのが注目であった。中山君がかなり長考したので、解説陣でいろいろ予想していた。



打たれた黒21は予想外であった。ここは剣先を透かし止めするのがいいと言っていたが、これとて黒勝ちになるわけではない。白24を打ってほつとしたと名人は言っていたようだが、その後の白26は危なかった。実は黒27から勝ちがあったようなのだ。いろいろあったが、名人の強さが際立った決定戦であった。